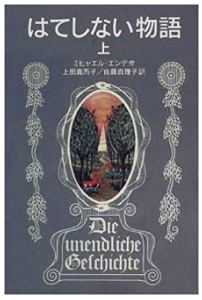
～洛西からの一読～

今回のテーマは「ながいおはなし」

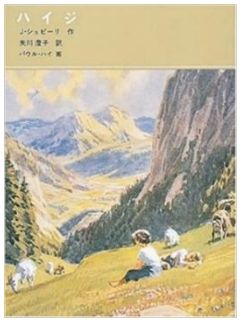
今回は少し長めのお話を紹介します。読んでみたいと気にはなっていたけれどなかなか手を出せずにいた作品です。いずれも映像化されているので、あらすじはご存じかも。自然描写、架空の世界、主人公の深層・・・がどのように表現されているか、じっくりと味わってみてください。



はてしない物語

ミヒャエル・エンデ　作　　上田　真而子・佐藤真理子　訳　岩波書店

主人公のバスチアンはさえない男の子、偶然入った古本屋で、興味ある表紙に誘われてファンタージエンの世界へ迷い込みます。当初は、現実とファンタージエンを行ったり来たりしていましたが、話が進むにつれてファンタージエンでの話が続いていき、いつの間にかバスチアンが勇者のようにファンタージエンで活躍しだすのです。冒険ファンタジーはゲームの世界で慣れている人たちも、本の世界で空想しながら読み進めてみてはいかがでしょうか。読むことで見えて来るものを大切にして欲しいです。話は長いですが、場面展開も早く、決して退屈はさせません。次々起こる戦いに疲れてくるときは少し読むペースを落としてみてください。お話の最後が近づく頃には、バスチアンがどのように成長したのか楽しみです。



ハイジ

J・シュピーリ・著　パウル・ハイ・画　矢川澄子・訳　　福音館書店

アルプスの山々に育まれたハイジは、活発で愛くるしい女の子です。気難しいおんじもハイジの行動にほほを緩め、やさしい目で見ています。誰にでも寄り添い、親切なハイジは村の人たちとも仲良く暮らしていました。しかし、突然に都会の生活へと環境が変わり、ハイジは窓から山の風景が見えないことに寂しさを感じていました。大きなお屋敷での暮らしは贅沢で、やわらかいパンがいつでも食べられるし、やさしいクララのおばあさまに本を読むことも教えてもらい、病弱なクララと過ごすことに慣れてきたのですが、ハイジは自分が自分でなくなる感覚におちいってしまいます。心を病んだハイジは再び山の生活に戻ります。山の空気と景色がハイジを元の姿に戻してくれそうです。おんじも、ペーターも、ヤギもみんなハイジの帰りを待っていました。アルプスの山にハイジの声が響いています。自然の中でのびのびと過ごす女の子の成長物語です。

この物語は、140 年前に執筆されました。大正時代には日本語（野上彌生子訳）の出版がされています。古くから読まれ続けてきた作品です。